

21日 研究会

48名の参加者を得て21日4時半から始まった研究会の司会は、「守る会」事務局の笠岡市教育委員会の大重先生でした。理科の先生だけあって、各地の状況はもちろん、研究内容も把握された上で無駄なくスムーズな司会運びで、充実した討議の場となりました。

★年間511体もの成体を確認している福岡市は、よほど大きな干潟を抱えているか、豊かな自然環境が保護されているのが伺えます。

★大分支部からは17年ほどの間に確認されるつがいが50～60から今や18つがいという状況であと数年もすれば絶滅するのではと危惧され、市に保護対策を依頼する必要ありと報告されました。

★長崎からは、平戸での幼生の確認、長崎大西村ゼミのアンケート意識調査の報告がありました。

★山口支部では3箇所50体を確認しており、安定的だが天候に影響されることもあるということです。

—こうした地域の状況をどうみるか—

(土屋会長) アマモは「ゆりかご」。発生状況は？また、干潟のドロがどの程度増えているのか、周辺の形成生物の状態から調査を。

(伊藤先生) 伊万里、福岡は来年が楽しみ。長崎や山口は場所が広い干潟なので、特に減少している感じがしない。福岡・佐世保のタッチング（実際にカブトガニに触れてみる）の取り組みはとても良いことだ。

—出された課題—

☆砂の搬入

カブトガニの生息地確保のために流される砂、人為的に減少する砂地を取り戻すために砂の搬入について論議されました。問題提起は伊万里支部の「粗い砂を入れたが、定着するも潮に流された」との発言から引き出されました。

(山口) コンクリート護岸に砂をいれ産卵場所を作った。
①法令下では潮より高く砂を入れられなくて、条件が厳しいこと②入れて2年目から産卵に来てるが高さがないので、水はけが悪く、腐ることもある。

(大分) H4, 5年と粗い海砂を入れたが、産卵地とならなかった。水はけが良くても周囲の環境悪く、卵が赤くなって腐るので要注意。(周囲の環境の悪い点を詳しく聞きたかったが尋ねそびれました。)

—(司会、土屋委員に意見もとめる)—

(土屋) 東大の宇田先生の言を紹介、『砂はたまるべくしてたまるもの。人工的に入れても効果は少ないのでは？しかし条件が合えば不可能ではない。』

(大分) 産卵場所の水流をみて、砂止めが必要かも

—理解できなかった論議—

1 齢を発見した場合、いつの産卵によるものなのか。という論議がしばらく続きまし



たが、どういうことなのかが良くわかりませんでした。素人の私が質問するのははばかれました。

このあと、四国からとても興味深い報告が出されました。

(愛媛西条市) 小学生によるゴミ拾い対策。漁協によるアマモ植えつけの成果 (コウイカの卵発見・マテ貝大量発生 見つかる種類と実数の増加)



(笠岡) からも状況報告があり、幼生、捕獲、産卵調査を柱とする取り組みが紹介され、2年続けての成果が語られました。(12又は13歳の脱皮殻を掲げての報告はブログで紹介)

司会は自然を元通りに回復させる努力は各地共通と指摘しました。さらに「守る会」として神島でのアマモ回復の取り組みがH17年から続いておりことを浅野先生が報告されました。すでに数箇所で見生が見られるということで、まさに海の生物のゆりかごとなりつつあるのだと実感できました。

笠岡の環境改善と共に、2年連続の成果はこれまでの安定的なふ化、育成、放流(年間5000匹)の努力の結果だとまとめられ、博物館のみつえださんが紹介されました。(そのご苦勞は翌日知ることとなりましたが、報告は後日にまわします。)



—その後の討論の中で興味深かったこと—

(食害)『え？誰が食べるの？』—地域でカブトガニの生息が有名になり、多くの人が調査に訪れるようになった。こうした人間の行動を見てからすが学習し、食べに来る(福岡)。しかも産卵後砂を掘って食べる(伊万里)。「1歳幼生や卵は栄養分が多いし、たくさんいるところを襲うのはわかるが大きいものは無理では(笠岡)？」の発言がありました。これに対し、「7歳も食べられた。カニなどもぐるがカブトガニは這ってしか逃げられない。」との説明も出ました。

(旧東予市) 合併して西条市になっているが、旧東予市の海岸は10km前後で、その95%が埋め立てられコンクリート護岸にされている。残りの5%の海岸に10年間放流を続けている。線を引いたように隣の今治市に入ると一匹も見つからないというのです。

驚きでした!!!

—感想—

久々に興味深い学習ができて、新鮮で楽しい時間でした。フィールドワークで裏打ちされていたこと、私自身の故郷生江浜がかつて最大の産卵場所生息地であったこと、子どもころの思い出が鮮明に思い出されたことなどさまざまな思いから集中できました。いまだに年間500匹以上の成体確認できるところが日本にあること、しかもつがいの確認数まで取れるところがあることは驚きでした。笠岡の海もカブトガニがそれ程に見られるようになればいいのにと願わずにおれません。

—その後に開かれた懇親会で撮った写真を貼り付けています—

以上21日の研究会の報告でした。22日は、午前中カブトガニ博物館見学に参加しました。午後から公開講座が開かれ、子どもたちの保護活動や土屋先生のお話を聞きました。